

京都名勝

特256

267



始



256
267



都

石
滕



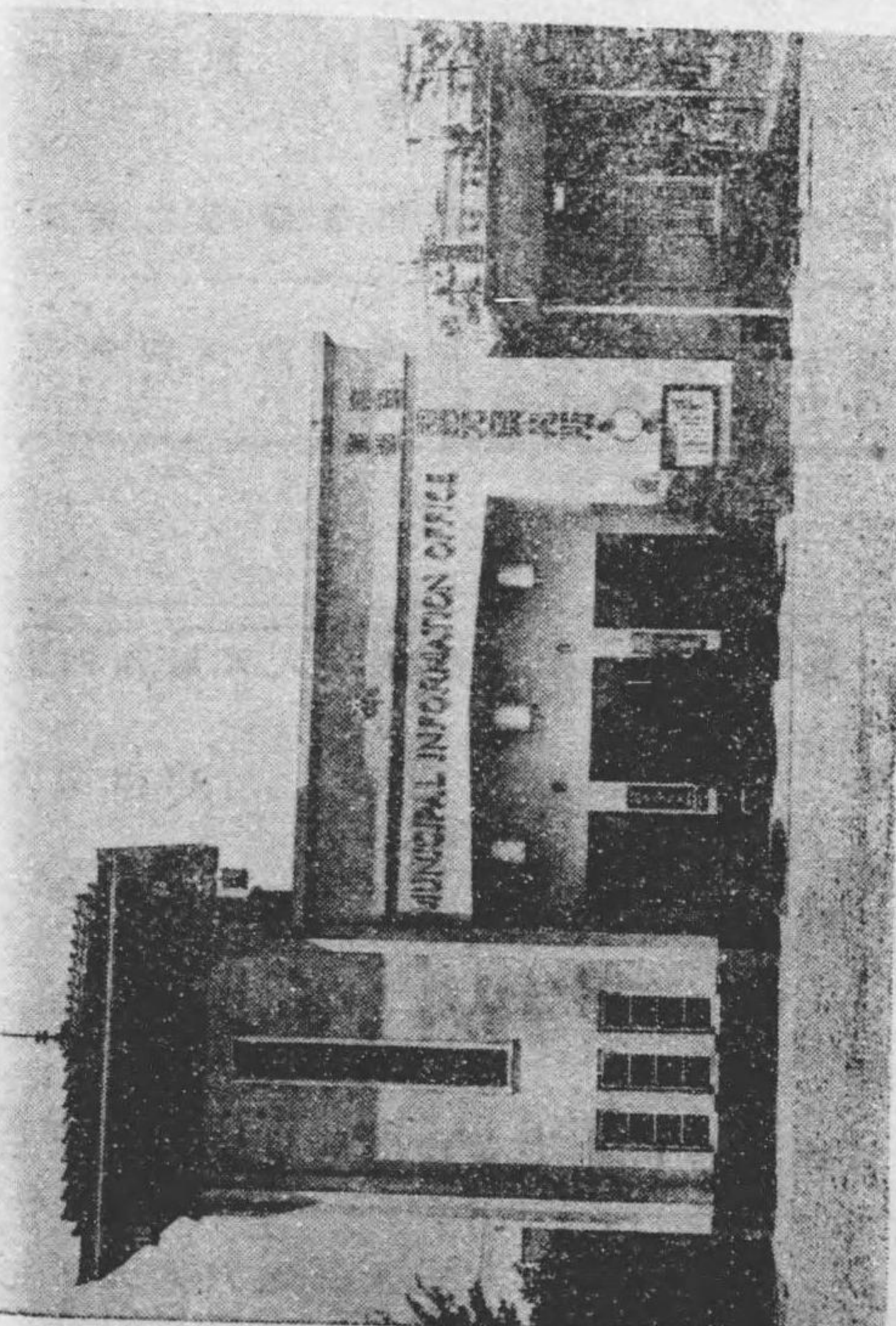
京都名所索引

六	五	四	三	二	一	番 號				
恩	豐	妙	養	三	東	稻	乃	伏	京	名
陽	臣			十		荷	木	見	都	
京	秀							桃	御	
都	法			三	福			山	御	
博	吉					神	神	山	御	
物	の			間				御	所	勝
館	墓	院	院	堂	寺	社	社	陵		
八	七	七	七	六	五	四	四	二	一	頁 數
	九			八		七				番 號
高	招	八	成	地	清	西	大	貞	豐	名
	坂		主				佛	照	國	
臺	魂	就	水	大	(方			神	神	
	の	神			廣					
寺	社	塔	院	社	寺	谷	寺	社	社	勝
一	一	一	一	一	一	一	一	九	九	八
三	二	二	一	一	〇	〇	九	九	八	頁 數



概して

- 神社、寺院、名勝、古蹟等の説明
 - 交通、旅館等の案内
 - 市内外案内地圖の進呈
 - 観光團體に對する特別の斡旋
 - 其他入浴者の用達に便宜供與
- その他各地よりの観光に關する照會に對し適切な回答や種々の斡旋を致します。



市設京都観光案内所 京都駅前

一、京都御所

京都市のほと中央に在つて、東は寺町通、南は丸太町通、西は烏丸通、北は今出川通の間を京都皇宮といひ、その中の一部である。桓武天皇のお奠めになつた平安京の内裏に相當するものであるが、その位置は全く異つてゐる。今の京都御所の地が正しく皇居となつたのは第百代 後小松天皇の御代からで、約五百四十年前のことである。

現在の御建物は安政二年に再築されたもので、安政の皇居と申してゐる。南正面に建禮門があり（天皇陛下御出入の時の外は殆ど開かない）東に建春門（俗に日の御門といふ）西に宜秋門（公卿門ともいふ）清所御門、北に朔平門があり、建禮門内の正北に承明門があつて、その内が紫宸殿の南庭である。紫宸殿の外には清涼殿・小御所・御學問所・常御殿などがあるが、御築地（御塀）の外からは拜することができない。

明治二年に東京宮城が定められてから、この京都皇宮は御歴代の即位の御大禮に用ゐさせられることとな

り、天皇御常住の宮居みやのではなくなつた。故に 大正天皇、今上天皇には何れもこの紫宸殿で即位の御大禮を行はせられ、今もその時お用ゐになつた高御座たかみくらと御帳臺みちやうだいを大切に紫宸殿内に保存してゐる。皇宮周囲の門には南に堺町御門・東に寺町御門・清和院御門・西に下立賣御門しもたうり・蛤御門はまぐり（天明八年正月の大火に始めてこの門を開いて市民の出入を許した。火に逢うて口が開いたから蛤御門と呼ぶやうになつた）と傳へる）・中立賣御門・乾御門いぬのがあり、北に今出川御門がある。この域内に御所や大宮御所おほみや（皇太后の御所）仙洞御所せんどう（上皇の御所）宗像神社むねがた・白雲神社しろくもなどがあるが最も大切なるは京都御所である。御所の西には贈正一位和氣清磨とそ
の姉廣虫を祭る護王神社あり、東には梨木神社ありて三條實萬同實美父子を祭る。何れも別格官幣社である。

二、伏見桃山御陵

もと豊臣秀吉の築いた伏見城、それをまた徳川家康が修築した本丸ほんまるの一部にある、明治天皇の御陵と、その東の 昭憲皇太后（藤原美子）の御陵を合せて世に桃山御陵と呼び奉る。

明治四十五年七月三十日、世界に類なき大帝 明治天皇がお崩れになると、天下の國民はすべてその父母を喪つたやうになげき悲み奉り、大正元年九月十五日泣く／＼こゝに葬り奉つて伏見桃山御陵と申し奉つた。御陵の形は上方が圓く下方が方形で、その上圓部はすべてコンクリートで固め、その上を小豆烏産の礫こいしで蓋うてある。下方部は三段にしきられ、最下級は前面の直徑が六〇米ある。石垣は全部南方の宇治川から取つた自然石しぜんせきで積まれてある。その外に御堀みほりがあり、更にその外に内玉垣うちたまがきをめぐらしてある。正面の御門の鐵の扉しらには菊の御紋章の金色が常に輝いてゐる。外玉垣そとは南面で一二七米・東西兩側面で一五四米程あり、一般参拜者はその外の柵外正面さくに立つて恭く拜禮するのである。

昭憲皇太后は一條忠香公の第三女で、明治元年に皇后とならせられ、明治天皇を助けて御徳ます／＼高くみらせられたが、大正三年四月十一日にお崩れになつたので、明治天皇の御陵の東（もとの伏見城の名護屋丸なごやまの所）に葬り奉り、伏見桃山東御陵ひがしのみやまと申し上げる。その規模は明治天皇の御陵の三分の二程であるが、形は全く同じで、唯御堀がないだけが異ふ。

乃木神社

桃山御陵の南下の方にあつて、門は西向、本殿は北向になつてゐる。陸軍大将乃木希典をまつた府社で、神戸の人村野山人が獨りで造營したもので大正五年に出来あがつた。門は臺灣阿里山の檜を用ゐ、その扉の板の大きいことは驚くべきものである。東北隅に記念寶物の陳列された庫があり、その南には將軍が明治三十七八年日露戦役に第三軍司令官として旅順口の攻撃にあたり、司令部に充てゝ起居した支那風の民屋が作られてゐる。本殿の西に夫人乃木静子をまつた静魂神社がある。大正七年に出来たものである。

三、稻荷神社

伏見街道に沿ひ、奈良線稻荷驛・京阪線稻荷停留場の東方にある官幣大社で、倉稻魂神・佐田彦神・大宮能賣神などをまつる。もと背後の山の頂上にあつたが弘法大師が朝廷の許を得て今の所に移築したといふ。

五穀豊熟・商賣繁昌を守る神として、世の信仰を受けること關東の成田不動・四國の金刀比羅宮と三幅對になつてゐる。本殿は天正年中に造られたもので、今國寶になつてゐる。官祭は四月九日であるが、私祭は四月の二の午の日に御幸式、五月一の卯の日に還幸式を行ふので、俗に「うまく」とお出かけ、うかくとお歸り」といつてゐる。別に二月の初午祭もあるが、何れも賑かなもので、名ある祭の一である。

四、東福寺

伏見街道一の橋の南の東側、京阪電車東福寺停留場の東方、市電東福寺終點の南に在る臨濟禪宗の本山で今から六百八十年程以前に藤原道家が建てたもので、聖一國師が開山となつてゐる。室町時代に再建された三門を始め月下門・浴室などが國寶として遺つてゐる。有名な明兆といふ畫家がこの寺に住み、立派な畫を多く描いて残したから、毎年三月十五日にはその筆に成る大涅槃圖（縦三丈九尺横二丈六尺の大幅で、釋迦往生の様がかいてある）を掲げて一般の參拜を許す。境内は東山の麓で静かな風景のいゝ所であるが、特に

通天橋から見た紅葉は京名所の随一として世に聞えてゐる。また本堂（佛殿）の東方に藤原兼實（九條家の人）で、よく源頼朝と親んだの廟や道家・明兆などの墓もある。

この寺の東北五町ばかりの地にある泉涌寺は眞言宗の名寺で、境内に四條天皇以後孝明天皇までの御歴代の御陵が多く在らせられる。

五、三十三間堂

東福寺の北方五町ばかり、東大路七條の西南にある天台宗の堂で妙法院の管理に屬してゐる。もと後白河法皇がその御所を捨て、寺となされたもので、中には一千一體の十一面觀音像を安置してある。堂の間口が三十三間で、一間の幅が二間であるから、軒下は六十六間—二〇米以上ある。故に三十三間堂といふ。一體の觀音は三十三種の觀音に化身し得るから、それが一千一體では即ち「京の三十三間堂の佛の数は三萬三千三十三體ござる」とこととなる。本堂の裏縁で昔行はれた通矢は、武士の弓術にすぐれたことを證明する

もので、紀伊藩の和佐大八といふ武士は、一晝夜に通矢八千百三十三本（總矢數は一萬三千五十三本で、その中の合格數である）を射たといふのであるから驚かされる。本堂の大棟は柳の材であるといひ、『三十三間堂棟由來』といふ淨瑠璃さへもある。

東向の發源院は天台宗延曆寺の末寺で、豊臣秀吉の側室淀君が、その父淺井長政の追善のために建てたものである。方丈の縁側の天井には伏見城で鳥居元忠等、味の忠死した板間を張つたといふので、世に「桃山の血天井」として名高く、松の間には依屋宗達（きよむね）の書いた國寶の襖繪がある。

妙法院は東大路七條の東北にある天台宗の門跡寺で、今から七十年ばかり前の文久三年八月に攘夷論の七卿が朝廷の御覺えを失ひ、この寺に集つて身の振方を議し、長州藩の武士に衛られて都落に決したことは有名な話である。今豊臣秀吉や桃山時代に關係の深い寶物を多くこの寺に保存してある。

豊臣秀吉墓 妙法院の南の坂路を東方に行けば豊國廟の跡があり、更に六百餘段の石段を登りつくすと、そこが阿彌陀ヶ峰の頂上で、一世の英傑豊臣秀吉の墓がある。秀吉が薨去した慶長三年から三百年に當る明

治三十年に黒田・蜂須賀などの舊大名が豊國會を起し、高さ三丈一尺八寸の五輪の大石塔を建てたが、今もなほ山頂にそびえて四方を睨んでゐるやうに見える。

六、恩賜京都博物館

妙法院の西向ひにある。明治二十八年に帝室博物館として建てられ、大正十三年三月に京都市に下賜されたもので、内には美術工藝品・古書籍・古文書の珍しい貴いものや歴史・風俗の参考品を陳列して、一般人の觀覽に供してゐる。館の北方園中には明治天皇・昭憲皇太后の御大喪に用ゐられた御品が奉安されてある。

七、豊國神社

恩賜京都博物館の北隣にある別格官幣社で、豊臣秀吉の靈をまつるために、明治十一年に造營された。唐門は伏見城の遺構といひ、唐破風の下の梁の上には巧な彫刻が施された國寶建造物で、門前の兩側には秀吉

の遺臣等の献納した石燈籠がいくつも立ち、本殿前向つて左方にある鐵燈籠は當代の天下一釜大工與二郎の作である。その南方に秀吉の夫人北政所淺野禰々をまつる攝社貞照神社がある。

大佛は豊國神社の北隣に在る。秀吉の造立した方廣寺の大佛は慶長元年の大地震でつぶれ、その子豊臣秀頼の再造した銅の大佛は江戸時代になつて地震のために又も倒れたから、間もなく鑄潰して錢とした。表に寛永通寶とあり、裏に文とあるいはゆる文錢で、世にこれは中風を豫防する効があるといひ傳へる。さてその後再造した木像は百年ばかり経て雷火に焼けたから、更に木像大佛を復興しようとしたが今見る通り半身だけしか出來ず、佛殿も假屋のまゝである。この佛殿の西南にある鐘はかの大阪陣の口實となつたもので、銘文に「國家安康……君臣豊樂」とあるを、徳川氏の方では「家康を安の字で二つに切り、豊臣を君として樂む」と倒に讀めるから、豊臣氏が徳川氏を呪ふためのものであると解釋したのである。

方廣寺のもとの境内は今の大佛・豊國神社及び博物館の地を合せた程のもので、西面の石垣の石の大きさにも、秀吉の意氣の雄大さがしのばれる。

八、西大谷

大谷といふは今の知恩院の在るあたりの地名で、もとそこに淨土眞宗の開祖親鸞聖人の廟があつたのを、慶長八年に徳川家康の計らひで、聖人の遺體を二に分け、西大谷と東大谷の兩廟所を造つた。

西大谷は眞宗本願寺即ち西本願寺の祖廟で、東大路五條の東側にある。眼鏡橋のかつた蓮池を咬月池といひ、正門内に本堂があり、阿彌陀如來の木像などが安置され、その背後に黒戸の御所がある。これが西大谷本廟で親鸞の遺骨を納め、左右の石垣の中に顯如以下歴代法主の遺骨を納めてある。門徒の遺骨も願によつてそこに納められるので、遺族の人々が絶えず詰めかけ、讀經の聲山内に溢れてゐる。

九、清水寺

西大谷の北の清水坂を東に登りつめるこゝ、そこに法相宗の音羽山清水寺がある。西國三十三所第十六番の

札所で、坂上田村麻呂の建立したものと云ふ。仁王門・三重塔・西門・鐘樓などの國寶建物を過ぎ、田村堂・朝倉堂を見、轟橋を渡り、中門を入つて東に進むと本堂がある。屋根を檜皮で葺き舞臺にした如何にも感じのいい、奇麗な建物で、十一面千眼千手觀音の國寶木像を本尊として安置してある。内陣の前の梁の上には角倉、末吉の二貿易家から奉納した朱印船の額が掲げられ、堂後にも立派な繪額が多く懸けられてある。本堂の東の石段を隔て、釋迦堂・阿彌陀堂・奥の院の三が順次北からいづれも西向に建てられてある。前の石段を南へ下ると音羽の瀧があり、その西一帯は櫻楓の名所で、「新高雄の紅葉」は世に知られてゐる。南方の丘上にある美しい三重の塔には千手觀音をまつり、「子安の觀音」として名高い。

地主神社は本堂の背後にあつて地主権現（大國主命・素戔鳴尊・櫛名田姬）をまつつてあり、謎の「熊野」にはこの邊の事を細かに讀みこんである。

地主神社の後方谷を隔て、北に清水寺の本坊成就院がある。江戸幕府の末頃に月照・信海といふ兄弟が相ついでこの住職となり、勤王の事に力を盡したために、一層本坊の名を揚げた。その庭は初め相阿彌が造

り、のち小堀遠州が補修したといふもので、誠に臭ゆかしい雅味のある名園で、中に豊臣秀吉の寄進したといふ振袖手水鉢がある。

月照と西郷隆盛とは生前極めて親しく、共に尊王攘夷の事に奔走したため、幕府の役人に睨まれ、身邊が危くなつたので、相携へて京都を落ち、終に薩摩湯に身を投じて果てた。併し隆盛は舟人に救ひ揚げられ、その後明治十年まで存命したが、今は仁王門の東北方に雨志士の記念碑が建てられて、その忠誠を表彰してある。

八坂の塔 清水寺を出て清水坂を二町程西に下ると、北へ下る産寧坂（俗に三年坂といふ）がある。それを下り、西北方に四五町行けばこの八坂の塔に達する。これはもと聖徳太子の建立された法観寺の塔であつたが、今あるものは足利義教の再建した國寶五重の塔である。

招魂社 はこの塔から東へ坂を二三町登つた靈山の中腹にある。明治の初年に創立されたが、昭和六年に新に美しく再建された。その南方には木戸孝允の勳撰碑・同墓・坂本龍馬・中岡慎太郎・玉松操・梁川犀巖

蘇本鐵石などの勤王烈士の墓がある。

高臺寺 は招魂社の西北下にある臨濟禪宗の寺で、豊臣秀吉夫人北政所（髪を剃り尼となつてから高臺院湖月尼といつた）が亡夫追善のために建立したもので、表門は伏見城から移した國寶建造物である。このあたりは萩の名所である。小方丈には秀吉夫妻に關係深い遺寶を陳列し、その東方には三江和尚の木像を安置する開山堂がある。前面の庭は小堀遠州の作といひ、淡泊古雅な趣を具へてゐる。更に東に進むと小高い所に靈屋（國寶）があり、中に秀吉夫妻の木像をまつつてある。その上の山中にはもと伏見城に在つたさいふ時雨亭と傘亭とが相對して立つてゐる。

一〇、東 大 谷

眞宗大谷派本願寺即ち東本願寺の祖廟で、圓山公園の東南に接してゐる。松の並樹のある參道を東に進み門を入つて南に行くと、西に茶所、東に阿彌陀堂、行きあたりに納骨受付所がある。そこから東に石段を登り

北に折れると右に廟所がある。西大谷の項で説いたやうに、門徒の納骨を請ふもの引きも切らず、香煙林間に充ち満ち、讀經の聲絶えず山に響いてゐる。

東大谷の北東には時宗の長樂寺があり、そこを東に通じ抜け山にさしかかると、一町半ばかりで尊王の漢學者頼山陽の墓が路の左側に在る。山路を四町程登れば將軍塚に達する。桓武天皇が平安京を奠められた時王城鎮護のためにとて、身長八尺の勇將の像を作り、それに甲冑を着せ、弓箭刀劍を帯びさせて、こゝから西向に埋めさせられた塚がそれである。東郷元帥や黒木大將の手植の松がその傍に榮えてゐる。坂上田村麻呂の墓は山科町栗栖野に在つて全く別物である。

一一、圓山公園

東山の麓の中央にある京都市の大公園で、面積三萬坪に近く、中程に名木「祇園の夜櫻」がある。この花は毎年四月七八日頃に満開するので、その頃は周圍に篝火を焚き、雪洞を點して觀客を迎へる。この櫻から東

は小川治兵衛の意匠によるもので、池には鯉躍り、噴水あり、小溪の流こゝに注ぎ、石橋土橋溪流にかゝり、櫻楓參差として芝生のあちこちをおほひ、瀧あり、丘あり、石段あり、曲坂あり、諸種の好景に四時人の目を喜ばせる。殊に茶店飯舗所々に散在してゐるから、悠々腹を満たして觀光するに便である。

一二、八坂神社

圓山公園の西にある官幣大社で、素戔鳴尊・櫛名田姫御夫妻神とその御子八柱神をまつてあり、世に祇園さんと呼ぶ。本殿・南樓門・南大鳥居等は何れも國寶建造物であるが、その他拜殿・舞臺・神輿舎・攝社・末社などに立派な建物が多し。拜殿の東の松の樹の間にある古い石燈籠は俗に忠盛燈籠と呼ぶ。今から八百一年程以前のある夜、平忠盛（清盛の父）が鳥羽法皇の御供をしてこの祇園社にさしかかつた時、俄に夕立が來て大雨烈しく降り注ぐ中に、頭は針を束ねたやうな形の怪物が、見えたと思ふと忽ち消え、消えたと思ふと見えずやがて姿を現はすといつた有様で、隨從の武士たちも身の毛をよだて、誰一人としてこの怪物に近よら

うとするものはなかつた。忠盛は法皇の御命をかしこみ、怪物が若し敵討したなら一刀に斬り棄てる身構で抜き足差し足寄りついてよく窺ふと、それはこの社の神主の一人が、例の如く常夜燈に御燈明を上げようとて、この社を指して来る途中で、これも俄夕立に會ひ、取敢へず路傍の麥稈を束ねてそれを頭にかぶり、火種を保たせるために時々その火を吹いては小走りに行くのであつた。法皇は忠盛の沈勇を賞せられ、以後一層の寵愛を加へられたが、その常夜燈こそ今残つてゐる石燈籠であるといふのである。本社にはかの有名な圓山應舉の畫いた鶏圖の衝立がある。

本社の官祭は六月十五日で私祭は即ち七月十七日の神幸と同二十四日の還幸で、いはゆる祇園祭である。

祇園祭はもと疫病をはらひ除けるために、今から九百年程前に始まつたものである。今では七月十日に四條大橋の上で御興洗の神事を行ひ、十一日氏子町内の鉾または山を飾り、それから毎夜その上に集まつて祇園囃子をする。十六日を宵山または夜宮といひ、家々の軒には神燈を掲げ、由緒ある毛氈などで室内を飾り屏風を立て廻し、鉾・山の提燈に火を點じ、盛に祇園囃子を奏する。これを見やうとて人々遠近から集まり

四條通は身動きもできない程に賑ふ。十七日の神幸祭には薙刀・函谷・放下・船鉾や岩戸山以下の山々が行列を組んで、八坂神社の御興の御旅所に神幸あるを出迎へる。二十四日の還幸祭には別々の山々が御供をして御旅所から氏子町内を廻つて本社に還らせられる御興三基を御送りする。この祇園祭は日本全國に聞えた大祭の一であるが、下に説く賀茂の葵祭と平安神宮の時代祭と染織祭とを合せて「京の四大祭」と呼ばれる。

一三、知恩院

知恩院は圓山公園の北隣にある浄土宗の總本山で、華頂山大谷寺ともいふ。今から七百年ばかり前に創立されたもので、現在の堂舎は大抵三百年程前に再建され、何れも國寶となつてゐる。山門は徳川秀忠の建てたもので、實に宏壯端嚴である。石段を登り茶所の前に出ると、本堂（御影堂ともいふ）が眼につく。これは東西四十米南北三十米餘りの大殿堂で、宗祖法然上人（圓光大師または明照大師などともいふ）の影像を本尊として安置し、後奈良天皇宸筆の「大谷寺」大正天皇宸筆の「明照」の勅額が内外に掲げられてある。

本堂の東南部の垂木の間に一本の傘が差入れてあつて、世にこれを「知恩院の時雨の傘」と傳へてゐる。これは本堂の再建された頃、山内に一匹の白狐がゐて、濡髪童子の姿となり、時の門主雄譽上人に仕へ、佛法の功德にすがらうと朝な夕な勤にも加はつてゐたが、後に上人から南無阿彌陀佛の六字をこの傘に書き與へられ、その効験によつて人間界に化生し得ることとなつたので、報謝としてこれを當山に遺し留め火災を防ぐ呪となるべきことを誓つて立ち去つた。されば爾來これをこゝに納め置くこととしたが、そのためにや明治年間圓山公園の也阿彌から火を出し、當山に延焼した時にも、茶所は類焼したが、本堂は完全に無事であつたといふ。本堂の東に國寶の經藏・勢至堂があり、堂後から衆會堂（俗に千疊敷といふ）方丈に至る三百間の廻廊は「鶯張り」と稱し、一步毎に春鶯の聲を聞くやうな妙なる音を出す。大方丈も小方丈も共に木曾の麝香谷から伐り出された特選の檜材で建てられたものといひ、本堂廻廊と共に國寶になつて居り、尚信を始め狩野家名手の筆に成る襖繪が多い。鐘樓は東南部の山腹にあるが、その大梵鐘は前に述べた大佛方廣寺のそれとそその巨大を争ひ、高さ一丈八尺・口徑九尺・厚さ九寸五分・重さ約二萬貫に近いといはれる。

一四、インクライン 上水道

知恩院の山門前を北に、青蓮院前を過ぎて三條通に出るこゝ、その邊を栗田口といふ。そこから更に東に行き都ホテル下を過ぎると、京都市上水道淨水池やインクラインに達する。

明治十五年の頃京都市發展のために琵琶湖の水を市内に疏通し、これによつて灌溉・舟運・上水・發電の利を得ようとして、同二十七年に至り工費百四十二萬圓を投じた第一疏水工事が竣工した。インクラインはその一部で、長さ三百二十間（五百八十餘米）勾配十五分の一の設計で、賦上の船溜から動物園南の運河までを船臺によつて貨物運搬船を上下させるものである。そして賦上のダムから十五分の一の落差を以てものすごいまでに落下する水は、二大鐵管で發電所に導かれ、五千七百キロワットの電力を起し、インクラインのドラム運轉・電車・電燈・市内諸工場の動力を供給する。

上水道は第二疏水工事によつて施設されたもので、明治四十一年に着手し、工費三百萬圓を以て同四十五

年に出来あがつた。今は驢上と松ヶ崎に淨水池を設け、全市百萬の人口にも安んじて衛生的な上水を供給し得ることとなつてゐる。

一五、南 禪 寺

インクラインの下端に近い橋を東に渡つて三町ばかり行くこ、臨濟禪宗の總本山である南禪寺の中門に達する。こゝは龜山上皇の御願により、その離宮の一部を捨て、寺となされたもので、後小松天皇の御代に京五山の順序（第一天龍、第二相國、第三建仁、第四東福、第五萬壽寺）を定められた時、五山の上位に置かれた。江戸時代の初に當寺の金地院から崇傳すうでんといふ傑僧が出て政治的に徳川家康の厚い信任を受けたので、一層本寺の地位を高め、堂舎の結構も大に整つた。

中門の北にある勅使門は禁裡の日華門を賜はつて移建したものといはれ、その東方の三門は藤堂高虎が寛永四年に再建したものであるが、豊臣秀吉の頃に石川五右衛門といふ大賊がこの樓上に潜伏して、久しく發

見せられなかつたのを、彼れが或る日この窓から外方を眺望した顔が、中門外の池水に映つたので遂に逮捕せられ、秀吉のために湯釜で煮て殺されたと傳へるが、若し事實とすれば彼れが住まつてゐた三門は、藤堂高虎の再建以前のものでなければならぬ。恐らくこれは無實の作物語つくりごとで、彼れは多數の部下を率ゐ、大名の城郭に類する程の堅固な邸宅に住み、大膽に殆ど公然に盜賊を働いたものと想はれる。今の三門は實に壯麗なもので、東福寺・知恩院のそれと共に京都東山の偉觀と見て誤なからう。その東の佛殿は明治四十一年の再建でまだ新らしい。その東上方に昭和四年に出来た寺務所があり、その西北にある大方丈は崇傳が禁裏から拜受した御所の建物であり、それに續く小方丈はまた資福堂といひ、もさ伏見桃山の別殿であつたものといふ。何れも國寶建造物で、その襖繪は狩野家諸名手の畫いたもので、かの「水呑の虎」は特に人に知られてゐる。庭園は小堀遠州作「虎の子渡し」といふ石庭である。

佛殿の南方林間にある南禪院は 龜山上皇御仙居おんみの上の宮の跡で、庭園は幽雅の趣に富み、その東南方に龜山天皇の御分骨所があり、東に支那僧寧一山の墓がある。

當寺の塔頭たつちうは今十一ばかり残つてゐるが、三門の南の天授庵は林泉の美を以て世に聞え、墓地には細川齋夫妻・梁川星巖夫妻・横井小楠などの墓があり、その西の眞乘院には山名宗全の墓がある。中門の西南にある金地院は徳川家康の黒衣の宰相といはれる崇傳の出た寺で、方丈は桃山の殿舎を移したものだといはれ、その庭は小堀遠州作「鶴亀の庭」と傳へられてゐる。

一六、岡崎公園

白河法皇の建立あらせられた法勝寺ほふしやうじを始め、いはゆる六勝寺のあつた跡で、明治三十七年から京都市の公園となつた。總坪數二萬五千餘坪ある。

美術館は昭和御大典を永久に記念し奉らんがため、市民の醸出による資金百萬圓を以つて建設することに決し、昭和六年起工、同八年十一月に竣工したものである。建坪千四百坪を有し二階建、鐵筋コンクリート造であつて、飽くまでも日本趣味を基調として近世の建築様式を具備した壯麗な一大會館である。

素よりこの使命は現代の美術品及び美術工藝品の傑作を普く蒐集陳列して一般の觀覽に供し、美術の振興と之れが思想の普及に寄與せんとするものであるから、隨時、市主催の下に帝展・美術展などの著名な展覽會を開催し、或は他の團體又は個人の主催にかゝる展覽會のために其會場を提供してゐるのである。

動物園は東部にあつて、その名の如くあらゆる禽獸蟲魚を飼養して一般人の觀覽に供してゐる。大正天皇の東宮にましました時御成婚の御慶事の紀念として、明治三十五年に市が設立し、翌年四月から開園したものである。境内は櫻の名所の隨一であるが、北部には紅葉の風致に富む所もある。

染織祭

本市産業の中樞を占める染織業者の組織する染織講社では毎年四月上旬（第一若は第二土曜日に式典翌日曜日に行列）その祖神に感謝の意を捧げ且つはその神徳を宣揚するため祭典及び行列を催す。

各時代風俗行列に奉仕する婦人は市内各遊廓の美妓を選抜したもので、その服装、調度が豊富華麗で、風

俗有職學上から見て正確なことは他にその比類がない。これは時代風俗を目的のあたり見る最も好い資料である。

而かも、かげろふ燃える百花爛漫の都大路を悠々と練り行く様は宛ら優婉典雅な繪卷を繰り廣げたやうで見る者をして思はず現代にあるを忘れさせる。

その行列は午後一時半京都府廳前に集合して、上古時代機殿參進の織女（皇祖天照皇大神の和妙・荒妙の神衣を奉織する織女が、紡織の器具を捧げて機殿に參進する姿を摸したもの）、奈良時代歌垣（上古多数の男女が、廣い場所に集つて、歌を唱ひ、舞踊して遊んだもので、之れは當時の婦女が打ち連れて歌垣の場所へ向ふ有様をあらはしたもの）、平安朝時代やすらい花踊（近衛天皇久壽元年に、洛中の兒女が風流を盡し、鼓笛を調べて紫野社に參詣した。其の有様をあらはしたもの）、鎌倉時代女房の物語（婦女が神社や佛閣に參詣する風俗を摸したもの）、室町時代諸職の婦人（染織關係の職業に従事する婦人十三種をあらはしたもの）、桃山時代醍醐の花見（名高い豊公の花見を摸したもので、特に北政所を始め、西の丸などの婦人が徒歩

で出かける行装をあらはしたもの）、江戸時代初期小町踊（七月七日に行はれたもので京中の兒女が一群をなし、美装して太鼓を打ち舞踏したものをあらはしたもの）、同時代末期京女の晴着姿（公家、武家、町家の婦女等の晴着姿を摸したもの）の次第を整へて出發する。

その順路は下立賣通を烏丸へ、京都商工會議所前に到り、屋臺から降りて徒歩で烏丸を四條へ、四條を河原町へ、京都市役所前に到り、こゝで歌垣・やすらい花踊・小町踊の行列は面白い歌謡に合わせて舞踊し、終つて再び屋臺に乗り、河原町通りを二條へ、二條を東へ至り、疏水二條橋畔で降りて再び徒歩で午後四時半頃祭場へ練り込み、祭神に額づいて、又神前の舞臺で前記のものが舞ひおさめられるのである。

一七、平安神宮

紀念動物園の北西方にある官幣大社で、桓武天皇をまつる。明治二十八年に京都市で平安奠都千百年祭を行ふにあたり、桓武天皇の御思召を追慕し、社殿を建て、その御靈をまつり奉らうと企てたが、政府では平

安神宮といふ社號と官幣大社に列することを許し、而も御内帑二萬五千圓をさへ賜はつたから、工事は程よく進み、同年二月には社殿も門垣も悉くできあがつた。疏水の慶流橋の少し北にある大鳥居は昭和三年の御大典を記念するために建てられたもので、高さ二三米弱・幅一八米餘・柱の直徑三・六四米、すべて鐵筋コンクリート造で、外面を朱塗とし木造と同様の感じを有たせることに苦心してある。それから正北二町半のところにある應天門は平安京創始の時の應天門と同じ様式に建てられ、屋根は碧瓦を以て葺き、棟の兩端に鸚尾瓦うづがたを載せ、柱・桁などは丹朱を塗り、垂木の鼻には黄土わづを塗つてあり、漆喰しちくの土壇の上に立つてゐる。南面の「應天門」とある三字は宮小路康文が古様をまねて書いたものである。この門から北方約七〇米の所に龍尾壇りゅうびだんがあり、その南庭の奥に拜殿がある。これは平安京の大極殿だいごくでんをまねて建てられ、寢殿造しんでんぞうといふ様式で、五十二本の朱塗圓柱があり、やはり屋根を碧瓦で葺き、鸚尾瓦うづがた（金色の）をのせ、木口に黄土を塗つてある。拜殿の左右に歩廊を各二〇米程出し、更に南に折れて二七米程のび、その端に高樓を設けてある。東のを蒼龍樓さきりゆう・西のを白虎樓びやくこといふ。この拜殿の北奥に本殿があり、それは檜の白木造である。境内の東部

と北部とは神苑で、社務所の南から出入し得る。池にかゝつた長虹の如き橋、その上に立つてゐる殿館などさながら龍宮城に遊んだ心地がする。白虎樓裏の枝垂櫻しだれは京の一名勝である。官祭は四月十五日で、私祭は十月二十二日これを時代祭といふ。

時 代 祭

明治二十八年に平安奠都千百年記念祭を行つた時、平安時代から明治の初に至るまで、政治兵亂・文物制度の變遷を風俗に現はした行列にしくみ、それを神幸の神輿に供奉せしめたのが時代祭の起りで、毎年十月二十二日即ち桓武天皇が新帝都たる平安京に入らせられた記念の日に行ふのである。その大要を述べる。當日午前八時頃から神幸の行列が動き始め、應天門を出て西に進み、疏水の冷泉橋れいせんを渡り、その西岸を南へ二條通を西へ、河原町通を南へ、市廳舎の行在所に入る。こゝで祭典を行ひ一同拜禮の後鳳輦は市廳舎前を西に出發し、寺町通を北へ、丸太町を西へ御所富小路入口内に行き、午後一時時代風俗の行列を従へて

丸太町を西へ、烏丸通を南へ、四條通を東へ、河原通を北へ、三條通を東へ、神宮道を北へ、午後四時頃平安神宮へ還幸されるのである。因みに神幸に供奉する時代行列は、各装束を整へて午前十一時に御苑内大宮御所の南方に集る。その行列は、(一)列外維新勤王隊(二)列外弓箭隊(三)第一徳川城使上洛列(四)第二豊公参朝列(五)第三織田公上洛列(六)第四楠公上洛列(七)第五城南流鎗馬列(鎌倉時代)(八)第六藤原文官参朝列(九)第七延暦武官出陣列(十)第八延暦文官参朝列(十一)神幸列の順序で、人物には源三位頼政・織田信長・羽柴秀吉・瀧川一益・丹羽長秀・柴田勝家・坂上田村麻呂・藤原百川・和氣清麻呂などがあり、この行列の間には平安講社の各區代表者が上下を着し一文字笠を戴いて供奉する。古今一千年間の文物の變遷・服飾の沿革がさながら走馬燈のやうに連々として眼前に現はれるので比類稀なる觀物といふべく、殊に慶流橋から應天門の間では列中の槍持・傘持・挾箱持・草履取などが舊幕時代の風體をまねて、手代りと交代するので、見物人はこゝを目掛けて特に群集する。

平安神宮の西隣の武徳殿も明治二十八年に平安京の武徳殿をまねて建てたもので、中央を演武場・その他を觀覽席としてある。外に弓術道場二ヶ所と武道専門學校があり、今は大日本武徳會の本部として、毎年五月四日全國の武術家を會して、武徳祭を行ひ、武技を競はしめる。

一八、黒谷

平安神宮の北東約三〇〇米のところには淨土宗鎮西派の總本山金戒光明寺があり、世にこれを黒谷と呼ぶ。淨土宗の開祖法然上人が八百年の昔比叡山の西塔の別所である黒谷を出て、この地に來られ、淨土宗最初の道場とせられたから、人呼んで新黒谷といつたが、今では略して單に黒谷といふ。昭和九年四月はかなくも本堂・勅使門・大方丈・小方丈・庫裏などが灰燼に歸したが其の後復興の計畫が進められてゐる。而かも今尙、阿彌陀堂・經藏あり、その東下の極樂橋を渡れば東南に熊谷堂がある。源頼朝の部下にその人ありと知られた熊谷次郎直實も、宇治川・一の谷の合戦に浮世のあぢきなさと武士の殺伐さを厭ひ、こゝに來て法然上人の弟子となり、甲冑を墨染の衣に着かへ、この堂の所に住んで念佛に餘念なかつたといふ。堂内の脇壇には

法然母衣絹の像が安置してある。これは上人が五十三歳の時、直實と師弟の約を結び、その記念にとて自像を鏡にうつしながら、無官大夫敦盛の着用してゐた母衣絹に書いて、直實の蓮生に與へたものと傳へる。こゝから東に數十段の石壇を登ると美しい三重の塔がある。これは徳川秀忠の追善のために今から約三百年前に建てられたもので、内には文殊菩薩の木像が安置してある。府下宮津町の切戸及び奈良縣磯城郡安倍村のと合せて日本三文殊とて世に名高い。塔の周圍は墓地で、その中に尊皇論の首唱者として世に聞えた山崎闇齋の墓がある。

黒谷の東方には淨土宗西山派の總本山永觀堂あり、本堂の本尊阿彌陀如來は世に「見かへり本尊」として其の名が高い。

金戒光明寺の北隣にある眞如堂は、眞正極樂寺ともいひ、今から九百年程前に比叡山から移された天台宗の寺で、今の堂塔は約二百餘年前の再建である。表門内には薬師堂・三重塔・地藏堂が西から東へと並び立ち、正面に本堂があり、慈覺大師作と傳へる阿彌陀如來の木像が安置され、その北に元三大師（本名は良源、慈惠大師といふが正しい諡號であるが、永觀三年正月三日に死なれたから、世に元三大師といふ。）の畫像をまつた元三大師堂がある。この寺では毎年十一月六日の夜から十六日の朝まで法會を行ふ。俗にこれを十夜といつて名高い。墓地には齋藤利三（春日局の父）の墓などもある。

一九、銀閣 大文字山

眞如堂前の坂を東北に下つて北行すること約三〇〇米で銀閣寺道に出る。それから東方にまた三〇〇米行

くと銀閣寺に達する。これは本名を慈照寺といひ、臨濟禪宗の寺である。足利第六代將軍義政は風流を好み、東山の麓のこの地に林泉を營み銀閣を建て、茶室を設け書畫骨董を集めた。かくて世に義政を東山殿とよんだ。その薨後遺命によりてこの別荘を寺とし、その法號により慈照寺としたのである。佛殿には釋迦如來の像を本尊とし、諸名家の墨蹟を陳列してある。その東に在るが東求堂で義政生前の持佛堂である。その東北隅に義政の創意でできた四疊半の茶室があり、特に「同仁齋」と呼ぶ。東求堂の北にもこの泉殿、今は弄清亭といふ聞香の間があり、その庭は近世の營築であるが、近頃(昭和六年)その東續に相阿彌意匠の林泉を發掘し、その復舊に努力されてゐる。銀閣は二階建屋根柿葺の國寶建造物で、下層を心空殿・上層を潮音閣といふ。東方に月待山・西背面に竹林負ひ南、及び東には當年造庭第一人の相阿彌の作つた林泉があり、池泉・瀑瀉・奇石・橋洲・臺丘など程よく配置され、造庭の模範とされてゐる。

我が庵は月待山の麓にてかたぶく空の影をしぞ思ふ。
とは義政がこの別荘で詠んだ感懷である。

大文字山は銀閣寺の東方に聳えるもので、如意ヶ嶽といふ。毎年八月十六日の夕、この山の中腹に松割木を大字形に組み、一齊に點火して盂蘭盆の送火とする。これから大文字山の名が起つたのである。大字の第一畫は長さ七三米(四十間)、第二畫百四十五米(八十間)、第三畫一二四米(六十八間)といふ大きなものである。これに倣つて同夜、金閣寺の附近の大北山で左大文字、上嵯峨の水尾山で鳥居、松ヶ崎の大黒天山で妙法、大宮の西賀茂山で船形の火が點される。

二〇、下賀茂 上賀茂兩神社 葵祭

市の西北方から流れて來る賀茂川と、鞍馬、八瀬方面から流れて來る高野川との合流地點を河合といひ、そこに葵橋と河合橋とが架つてゐる。この橋の上にはいはゆる下鴨といふ地域があり、官幣大社賀茂御祖神社(世に下賀茂神社といふ)はそこに在る。後に説く賀茂別雷社の御母の玉依姬命と、玉依姬命の御父鴨武角見神の二柱がまつられてゐるので御祖といふ。鴨武角見神は、神武天皇の大和御討入に際り、皇軍の御先導を

し奉つた八咫鳥で、神武天皇の頃から既にこゝにまつられたといひ傳へる。桓武天皇が平安京を奠めさせられると、上下兩賀茂社を以て王城の鎮守とされ、二十年一度の改造を命ぜられ、後には山城國の一の宮と定められ、歴代皇室の御尊崇あつく、嵯峨天皇の御代には伊勢皇大神宮に准じて賀茂齋院を置かれ、江戸時代には下賀茂神社だけで朱印地五百餘石もあつた。

葵橋から東北を望むと、本社のある糺の森は森々として茂り、如何にも神々しい感じがする。劍先から北に折れ、一の鳥居を過ぎて社地に入るに、東を流れる泉川と西を流れる瀬見の小川を左右に見る。攝社河合神社や神宮寺跡を拜し、二の鳥居・三の鳥居を過ぎると、緑林の間に眼ざめるばかりの朱塗の樓門がある。その内に舞殿、その西に神服殿、その西に供御所、その南に攝社出雲於神社（俗に比良木神社といひ、この近邊に榊・椿などを植ゑて置くに、いつの間にかすべて柎に變つてしまふといふ）及び雷殿あり、舞殿の北に中門、その正北に幣殿、その左右に東御料屋・西御料屋があり、幣殿の北に祝詞屋があり、その北に東本殿（玉依姬命をまつる）西本殿（鴨武角見神をまつる）がある。舞殿の東方に橋殿、その東北に細殿があ

る。以上何れも國寶建造物で、古きは寛永年中（今から約三百年前）新しきも文久三年（今から七十年前）の再建で、門廊殿舎のかくまで完備してゐる例は稀である。

下賀茂神社から鴨川の堤を西北に浜る事一軒餘で御蘭橋に達する。それを渡つて東に一〇〇米ばかり行けば賀茂別當神社（世に上賀茂社といふ）の境内である。社傳によれば下賀茂社と同じく神武天皇の御代頃から存した古い社で、桓武天皇以來下鴨社と全く同一の御尊崇をさしげられ、祭儀奉幣等今に至るまで同日同様に行はれる。一の鳥居を入り、兩側の美しい芝生の間を北進すれば、右に御所の屋を見つゝ二の鳥居に達する。こゝを入れば左に細殿と拜殿・右に樂の屋・橋殿・舞殿・土の屋・廳の屋あり、御手洗川の清流には酒殿橋と玉の橋がかゝつてゐる。北西に進むと樓門の前に行く。樓門内には右に幣殿・忌子殿・左に高倉・廻廊があり、中門前に立つて本殿に拜禮する。本社には八の攝社と十四の末社があり、門廊殿舎は下鴨社と常に同じく再建せられ、今は殆ど皆國寶となつてゐる。歴代天皇の大嘗祭に用ゐられる白酒黒酒の神酒は、上賀茂の造酒人がこの境内に造酒殿を構へて醸造する習はしである。

葵 祭

葵祭は毎年五月十五日前記賀茂上下大社で行はれる大祭で、既に述べた祇園祭・時代祭と共に京都の三大祭として世に知られ、中古では單に祭といへばこの祭をさすに解された程に著名であり、石清水八幡宮の祭を南の祭といふに對して、北の祭といつた。社傳によるに今から千四百年近くも前の 欽明天皇の御代に、風雨時を得て五穀の豊熟せんことをこの神に祈り、その時馬に鈴をかけ、人に猪懸をかぶらせたが、後には神の夢告によつて神に葵を捧げ、人々も葵の葉と桂の枝をその衣冠に着けるやうになつたといふ。この日の祭儀の概略を記すに、早朝勅使以下の諸役が京都御所に參集し、装束を整へ列を組み、午前八時に西側の公家門から繰出し、南に折れ更に東に向ひ、建禮門前を過ぎ、清和院御門を出て、河原町通を北に、出町から葵橋を渡り、劍先から北行して下賀茂神社に入る。行列の順序は警部・看護長代・檢非違使代・火長代・檢非違使・火長・調度掛・童・鉾持等・山城使代・童・雑色・取物・舍人・白帳・退紅(傘・沓などを持つ下官)。

衛士代・御幣概三基・史生代・雑色・白帳・馬部・走馬・馬寮使代・御所車・替牛・和琴・舞人・口取代・勅使・口取代・牽馬・小舍人・陪從・内藏使代で、列中には毎年意匠を新にした花傘を作つて、内藏使代の後に高きさしかざして進行する。

神社では宮司以下の神職が早朝から出仕して祭儀の準備を整へ、勅使以下の參向を待受ける。勅使の行列が着すると、舞殿で勅使は宣命を奏し、宮司は祝詞をあげる。次に御馬二匹拜殿を三周し、次に陪從駿河歌を唱ひ、舞人は舞殿に昇つて駿河舞を奉仕して神前の式を終へ、次に糺の森で二頭の馬の走馬を行ふ。勅使以下晝食をとり、更に行列を整へて、鴨川の西堤を北西に上賀茂社に至り、同様の様式を行つて今日の葵祭を終へるのである。

二一、大徳寺 船岡山

京都御所の西北方、市電北大路線大徳寺前停留場に近く、臨濟禪宗大徳寺派の本山である大徳寺がある。

今から六百年ばかり前の 後醍醐天皇の御代に創立されたもので、室町時代には南禅寺と共に京五山の上位に置かれ、有名な一休和尚や江戸時代の澤庵和尚はこの寺の住職であつた。總門を西に向つて入り約七〇米行くと勅使門がある。その北にある三門は安土桃山時代に茶道の宗匠千利休が建立したと傳へる。それから北に順次佛殿・法堂・方丈がある。方丈の南面にある唐門は前に説いた豊國神社のそれや、後に述べる本派本願寺のそれと共に安土桃山時代を代表するに足るもので、その梁の上の彫刻の複雑で生氣あることは誰も感歎する所であり、左甚五郎一派の名手に成つたものに相違ないといはれる。庭は遠い比叡山の景色を取入れたもので、これ等を借景の庭といふ。本寺山内には多くの塔頭（附屬寺のこと）があり、中にも方丈の背後にある眞珠庵は一休和尚の庵室であり、その境内に茶道の開祖珠光の墓がある。また庫裏の西にある聚光院には千利休の墓があり、その西の總見院跡には織田信長の葬儀場の跡がある。その西方約二〇〇米の所に小堀津州意匠の庭で名高い孤篋庵がある。聚光院の南の三玄院の春戸には石田三成の墓、勅使門の南方黃梅院には小早川隆景の墓がある。

船岡山は大徳寺の南西にある丘で、頂上には贈正一位織田信長の英靈をまつた別格官弊社建勳神社がある。

二二、金閣寺

船岡山の西方の大北山の南西に金閣寺がある。こゝは足利將軍義満がその職を子義持に譲つて後、別荘を營み三層の樓閣を構へてそれに金箔を置き林泉を築き、悠々として風流に耽つた遺蹟で、その墓後臨濟禪宗の寺とし、法號によつて鹿苑寺といつたが、世には金閣寺を以て知られる。總門・中門を過ぎ、本堂に入れば、諸種の寶物を陳列して觀覽に供し、庭には「佗助椿」「陸舟松」などの珍木がある。金閣は本堂の西方にあり、南に鏡湖池を控へ、遠く西に衣笠山を負ひ、幽雅にして婉麗を兼ね、公家と武家との兩様を具へてゐる。池には當年の諸大名から献せしめた巨石を配し、閣は寢殿造から書院造に移らうとする状を示し、下層を法水院・中層を湖音洞・上層を究竟頂といひ、今金箔を置いてあるのは上層だけである。北庭の赤松は

亭々^{すうらら}と高く、金閣とよく調和してゐる。こゝを過ぎて北高地の夕佳亭^{せきかいてい}に至れば、金森宗私^{そくわ}といふ茶人の意匠に成る江戸時代初期の茶屋で、南天の床柱・萩の木を用ゐた棚などあつて珍しい。

二二二、北野神社

北野神社は贈正一位太政大臣菅原道真をまつる官幣中社で、市電北野線の終點に近く、金閣寺の東南七町ばかりの所にある。この社は今から約一千年前に創立され、間もなく右大臣の藤原師輔^{もろすけ}が多大の費用を投じて社殿を完成し、一條天皇の御代から御参拜のための北野行幸が始まり、歴朝の御崇敬もあつく、一般庶民の信仰も極めて深く、毎月二十五日の縁日には境内は参拜者を以て埋められる程である。官祭は八月四日で私祭としては二月二十五日の梅花祭、十月一日の神幸祭、同四日の還御祭（以上二を合せて芋莖祭^{すくま}といふ。）が世に知られてゐる。市電下の森停留場の北に神苑を設け、その中に石の大鳥居がある。南入口の石鳥居をくゞり豊臣秀吉が天正十五年十月一日に大茶の湯の會を開いた跡といふ雪見丘^{ゆきみのかみ}を右に見つゝ北行し、檜皮葺^{ひばぶき}

の美しい樓門を辿つて中に入るこ、右に文子天満宮（七條通大宮西に入る所に住まつてゐた文子といふ女に天満天神の神託^{しんたく}があつて、菅公をまつたのが京都での天満宮の起源であるといふ）左に繪馬堂を見る。文子天満宮の北には昭和三年にできた鐵筋コンクリート造東洋趣味の寶物殿があつて、その中には國寶の北野天神縁起繪卷^{えんぎまき}三種を始め、菅公及び北野神社に關する文書・記録・書籍・器物・装束の類が幾百點もなく陳列して解説されてゐる。繪馬堂には今なほ筆跡の上達を望む信者が、時々その書蹟を献納する。その北方に日月星の彫刻を梁上に施した三光門があり、それを入ると國寶建造物の廻廊である。本殿と共に慶長十二年の頃片桐且元がその主豊臣秀頼の命によつて再建したもので、その由來が本殿前面の欄干^{らんかん}の撥寶珠^{はくほうしゆ}に記されてゐる。三光門の東北にある古い石燈籠は渡邊綱（源頼光^{げんらいこう}の四天王といはれた一人）の献納したものといふ。その邊には美しい紅白梅の大木があちこちにある。本殿は八棟造^{やっしむつくり}といふ建方で、拜殿と幣殿^{へいけん}と樂の間^{がく}と本殿とを連続して建てたものであるため、棟木^{むねぎ}が七つあつまつてゐるから珍しい。本殿の西と北とには攝社や末社が多くまつられてゐるが、特に東門を入つた左側にある地主神社は最も古いものである。本社の西境は紙

屋川であるが、その東堤は御土居といふもので、豊臣秀吉が京都の市區整理をした時、市の内外を區劃するために設けた土手の名残である。

北野神社の裏門から出て左に折れ、紙屋川の櫻橋を渡つて西に一〇〇米程行く官幣大社平野神社がある。この社には今木神・久度神・古開神・比咩神の四柱をまつてある。拜殿の接材造と神苑の櫻で世に名高い。

二四、二條離宮

市電北野線の堀川二條停留場の西にある離宮で、もも今から三百餘年前に徳川氏が京都に於ける宿館に充てるために築いた城宅である。徳川家康と豊臣秀頼との二條城會見は歴史に名高く、この外徳川家光の將軍宣下・後水尾天皇の行幸・徳川慶喜の大政奉還の上表なども皆こゝで行はれ、記念すべき歴史的舊蹟である。明治の初京都府の管理に屬し、京都府廳をこゝに置き、同六年陸軍省の管轄に移し、同十七年七月から宮内

省の手に歸し、離宮とせられて今に及ぶ。大正四年の御大典にはこの地内に大饗宴場が設けられたのである。

もも本丸には天守閣もあり立派な城であつたが、度々の災難で失はれ、今は二の丸の殿舎に昔の^{おもひ}倂を残してゐるだけである。東側の大手門を入り枳形を南に廻り、唐門の東のくゞり門を入りて北行すると、桃山時代の特色のある御車寄に達する。これから西北方に第一殿から第五殿まで五の殿舎が皆善美を盡した書院造で建ち並び、殊に第三殿には大廣間があり、第四殿には黒書院、第五殿は白書院で、棟や杉戸には狩野家の名畫があり、床・違棚・窓・御納戸（武者隠）の美しさいかめしさ何れも立派なもので、黒書院の南には八陣の庭があつて小堀遠州の作といはれる。城壁の處々には櫓があり、周圍には深い堀をめぐらし、その外は廣い芝生となつてゐる。この離宮は京都に在る三離宮の一で、他の修學院離宮や桂離宮の茶室を主としたものは趣を異にしてゐる。

二五、西本願寺

市電七條堀川停留場の北方約一五〇米の地にある浄土眞宗本願寺派の本山で、本名を本派本願寺といふ。眞宗の開祖親鸞が亡くなられた後、その女覺信尼は父の廟を祇園林の東北（今の知恩院の山門の北）に建て佛寺をも建て、その眞影を安置した。龜山天皇はこれを勅願寺とし、始めて本願寺の號を賜はつた。これが本願寺の起りで、今から六百六十年前のことである。第八代の法主蓮如の時は應仁の大亂の際で、山法師は横暴を極め本寺を焼打したので、蓮如は開祖の眞影を奉じて諸方を流浪し、のち漸く山科におちついて本寺を再興した。第九代實如の時朝廷に献金した功を以て准門跡を許された。（今門徒が本願寺の法主を御門跡と尊稱するのはこの故である）第十代證如の時日蓮宗徒に迫られて山科から大阪の石山（今の大阪城址の地）に移つたが、第十一代顯如の時織田信長と六年の間戦を交へ、正親町天皇の勅命によつて和睦し、この際紀伊國鷲の森に移り、更に和泉國貝塚・大阪の天満を経て、今から三百四十年ばかりの昔、豊臣秀吉から

ら現在の所に十萬坪の地を興へられ、三四年の間に堂塔伽藍を完成した。その後二十餘年を経て火災にかつたが、間もなく御影堂・阿彌陀堂が再建され、ついで聚樂第や伏見城の建物を寄附されて境内に移築し、現今の美觀を出現した。今本山の別院は三十六、末寺一萬に近く、信徒五百萬を越えるといふ。

阿彌陀堂は正門内に在る國寶建造物で、東西二十一間（三八米餘）南北二十三間（約四二米）で、阿彌陀如來の立像を本尊として安置する。御影堂（國寶）はその南に並び、東西二十四間（約四四米）南北三十一間（約五六米）の大堂で親鸞の木造坐像を本尊とするので御影堂といふ。内陣の正面梁上に掲げてある見眞の二大字の額は、親鸞の大師號を 明治天皇が御染筆あらせられたものである。堂前の大銀杏の樹は本寺に火災の起らうとする時水氣を噴いて消止める靈木であるといひ傳へる。その東南方の滴水園といふ庭の中に在る三層の飛雲閣（國寶）はもと聚樂第にあつた優美壯麗な建物で、狩野永徳やその養子山樂の畫いた名畫がある。その西に廊下續きで黄鶴臺があり、これも亦豊臣秀吉の用ひたもので、その浴室もある。庭の東北隅には國寶の鐘樓があり、その鐘はもと太秦の廣隆寺にあつた名鐘である。御影堂の南から南裏へかけては、もと伏

見桃山御殿にあつたものが幾つも並んでゐて、皆國寶となつてゐる。即ち唐門・車寄・大玄關・鴻間（大廣間ともいふ）白書院・黒書院・能舞臺などである。欄間・長押の彫刻の自由で巧妙雄大なこと、襖繪・壁貼付畫の奔放華麗なこと、何れも桃山時代の特色を十分に發揮してゐる。

二六、東 寺

西本願寺の西南六〇〇米程の大宮通九條北に在る眞言宗の總本山で、本名を教王護國寺といふ。今から一千百年程前に空海（弘法大師）が嵯峨天皇から、東寺を賜はつて眞言宗の根本道場とされたのがその起りで、歴代天皇の御歸依あつく、殊に後宇多・後醍醐二天皇などは格別の御保護を寄せられ、多くの寺領をも賜はつた。今でも一月の八日から一週間御修法を行ひ、今上陛下の御衣を拜禮して、聖壽無疆の御加持を行ひ奉り、のち皇室に返納し奉るを例としてゐる。

北大門（國寶）を入つて約一〇〇米南に行けば八足門（國寶）があり、それを入れれば南に觀音堂がある。これ

はもと本寺の食堂で、今は千手觀音の立像を本尊としてゐる。昭和六年堂内から火を出して多くの佛像と共に燦失したが、昭和九年四月弘法大師千百年忌を機として再建された。その南に國寶の講堂（本尊大日如來）が順に並び立つてゐる。豊臣秀吉夫人・同秀頼の再建したもので何れも宏壯である。南に南大門（國寶）東南に五重の塔（國寶）、徳川家光再建・高さ百八十三尺七寸（約五六米）東に校倉（國寶、經藏）西北に大師堂（國寶、弘法大師の坐像を本尊とす）がある。

八足門外の東側には塔頭の觀智院がある。後宇多法皇の御創立で、今は慶長年間の再建にかゝる國寶の本堂・書院あり、襖繪は宮本武藏・長澤蘆雪らの筆で、五大虚空藏銅像は支那から傳來の國寶佛であり、經藏には經典書籍の珍品が甚だ多く藏せられてゐる。

二七、東 本 願 寺

京都驛の北方約四〇〇米にある眞宗大谷派の本山で、本名を大谷派本願寺といふ。徳川家康は本願寺の勢

力の侮るべからざるを知り、今から三百餘年前それを二分して兩本願寺とし、第十二代教如を以て東本願寺の門主とした。本寺の堂宇はその後再三の火災に罹つたので、今見る諸堂は明治年間に再建されたものばかりである。

烏丸通に面し菊御紋章の金色に輝く勅使門と山門とは、共に明治四十四年に落成したもので、山門の莊重端嚴さは特に人目をひくものがある。山門の西方にある御影堂は大師堂または開山堂ともいひ、親鸞の木造坐像を本尊として安置し、東西三十二間（約六〇米）南北三十五間（約六四米）棟高二十一間餘（約三八米強）の大堂で、木造建築としては世界無比の廣大なものである。これと廊下續きで南に阿彌陀堂があり、阿彌陀如來の木造立像を本尊として安置してある。廊下の側にある毛綱はこの兩堂の巨材を運び或は上方に掲げる時に用ひたロープで、皆當時の信徒が翠の髪を剪つて獻納したものである。大師堂の梁上に 明治天皇御染筆の見眞二大字の勅額を掲げることは西本願寺と同一であるが、原本の勅額は一年交代に兩本願寺の間で保管されるから、他の一本は模本である。鐘樓・大藏殿・小藏殿・白書院・黒書院・能舞臺・集會所など何

れも明治二十八年から同四十四年までの造立である。現今別院は五十二、末寺は八千三百餘、門徒約六百萬人に及ぶといふ。

二八、新京極 賀茂川

豊臣秀吉が京都の市區を整へるにあたり、もと洛中にあつた寺院を洛外に移し、地を與へて堂宇を建てさせた。その結果東京極を寺町通と呼ぶこととなつた。新京極はこの寺町通の東に接し、三條通と四條通との間を南北に通ずる街路であるから、新京極と名づけたのである。もとは浄土宗の誓願寺の境内であつたが明治五年にこの新道を開通し、兩側に商店を建て、繁華な商區とし、明治の末年には更に第二新京極をも作つた。こゝは市中最も繁華な地區で、演劇・活動寫眞・落語・講談・萬歳などの興行場を始め、バー・カフェ・レストラン・飲食店・撞球場・雑貨店など立ち並び、遊覽の客晝夜なく雑沓する。

河原町通は寺町通の東一町餘（一二〇米）程の街路で、昭和二年に擴築し電車軌道を敷き、近代式の店を

開いたので、四條通と並んで盛り場に數へられ、その三條五條間は毎夜夜店を出し、プロミナードとして聞えることゝなつた。

賀茂川は鴨川とも書く。山城・丹波兩國の境にそびゆる棧敷ヶ嶽にその源を發し、南東に流れて鞍馬川貴船川を合せ、下鴨神社の南で高野川を容れ、市中を南流し、更に西南流して桂川に入る。長さ約一二軒。水質染物に適し、鴨川染・友禪染に利用される。四條大橋は三條大橋・五條大橋と共に昔からの官橋で、今から八百年程以前に始めて架けられたといふ。今の橋は大正二年にできたもので、現代式鐵筋コンクリート造とし、外面に石材を用ひ、橋面をアスファルトで舗装し、高欄は金屬製で、所々に燈籠を設けてある。長さ九〇米餘・幅二二米弱で、中央に電車軌道を敷いてある。

都踊は毎年四月一日からその末日まで、四條大橋の南東の歌舞練場で催される舞踊で、京都名物の一である。登場人員は地方十一人・囃方十人・踊子三十二人を一隊とし、祇園新地から七隊の演者を選出し、四日間で一巡し交代する定めである。踊子は華麗な揃の衣裳を着、一樣の美しい花扇を持ち、歌の曲につれ

て兩花道から練り出し、舞臺に上つて踊る。その美しさあでやかさに見物の人々は皆酔はされる心地がする。

鴨川踊は先斗町（鴨川の西畔で三條通と四條通の間をいふ）の歌舞練場で、毎年五月一日から五月二十四日まで行ふ舞踊で、また京名物の一である。大舞踊場は昭和二年にできた鐵筋鐵骨兩用コンクリート造で、外觀は近代式東洋趣味の洋館で、内部は善美を盡した装置である、舞臺は一階に設けられ、その他地階・二階・三階・四階まであり、種々の室々が十分に取られてある。登場人員は地方二十人・囃方十人・踊子二十八人すべて五十八人を一組とし、先斗町から四組を選出し、四日で一巡交代することゝなつてゐる。その美しさに對し、あでやかさは、都踊と甲乙を附けがたい。

二九、比叡山 延曆寺

下鴨神社の東南約三〇〇米、葵橋の東約一二〇米の出町柳驛から、叡山電鐵の電車に乗り、元田中・茶山・

一乗寺・修學院・山端(鞍馬電鐵の分岐點)・三宅八幡の各驛三哩半の平坦線を過ぎると、終點八瀬驛に着く。この間十八分かゝる。こゝから遊園地を経て西塔橋を渡ると、比叡登山ケーブルの起點西塔橋驛である。こゝから延長一四五八米餘角度二十餘度のケーブルで九分間上昇すると、終點四明ヶ嶽に達する。こゝから東行三〇〇米程で蛇ヶ池遊園地に至り、東南方に轉じて更に三〇〇米登れば比叡山頂將門岩に着く。なほ延暦寺に直行しやうとする者は、四明嶽驛から北東に四〇〇米程行き、高祖谷驛から空中索道によつて六四一米餘東方の延暦寺驛に至り、それから東南に徒歩七〇〇米ばかりで根本中堂に達するのである。

比叡山は京都府と滋賀縣に跨る高山で、海拔八二三米あり、東に琵琶湖を見下し、遠く伊吹山脈を隔て、飛驒山脈の山々を望み得る。また西南は京都市を経て淀川を一目の下に集め、遙に金剛山脈を指すことのできる。

延暦寺はこの山の滋賀縣の部に在る天台宗の總本山で、山内を東塔・西塔・無動寺・横川の四區に大別する。本寺は傳教大師が今から一千百餘年前に開創されたもので、歴代皇室の篤い御尊信と公家武家の歸依を

受け、その僧侶山法師は勢に任せて一時横暴を極め、白河法皇さへも惱まし奉つたのである。然し後醍醐天皇の御代には一方ならぬ忠誠を盡した。今から三百五十年程前に織田信長の焼打ちに遇ひ、東塔・西塔以下の堂塔房舎山王二十一社の祠殿を悉く焼失したが、豊臣秀吉・徳川家光等の援助によつて再建を完成し、現在の盛觀を見るに至つた。

四明嶽の觀測所傍から坂路を北に降り、東に折れて五〇〇米程行けば山王院に達する。こゝには千手觀音がまつられてあるので、千手堂ともいふ。こゝから南行一五〇米で辨慶水がある。その東方三〇〇米で戒壇院がある。こゝは僧侶が大乗戒を授ける所で、その東下に大講堂(國寶・本尊大日如來)があり、その東北二〇〇米の所を根本中堂がある。こゝは延暦寺の最初の地で、藥師如來を本尊とし、壯嚴極まりない堂舎で桁行百二十四尺(三七米餘)、梁間七十八尺(二四米弱)、高さ棟まで八十尺餘(二四米餘)あり、これに廻廊をめぐらし、端麗な感じを持たせる。根本中堂から南に行けば無動寺明王堂に向ふが、中途に坂本ケーブルがある。これによつて降り、約二〇〇米ばかり西北に登れば官幣大社日吉神社(祭神一の宮は大山咋神)の二の

宮は大物主神)があり、國寶建造物も多く、珍しい日吉鳥居もある。

三〇、鞍馬寺

出町柳驛から鞍馬電鐵の電車に乗り、山端驛で叡山電鐵線と別れ、三宅八幡前・岩倉・木野・市原・二の瀬・貴船口諸驛を過ぎ、約二十五分で鞍馬驛に達する。下車し一〇〇米程行けば鞍馬寺の樓門を見る。

本寺は今から一千百年程前に、藤原伊勢人の建てた天台宗の寺で、平安王城の北方守護佛として名高く、朝野の崇敬を受けたものである。樓門は仁王を安置した宏壯な門で、それから三〇〇米程登れば大已貴命を祀つた由岐神社があり、その拜殿はいはゆる荷堂の形をなし國寶である。本殿の背後には源義經が少年の時遮那王といつて住してゐた東光坊の跡がある。こゝから本堂まで約九〇〇米ばかりは「九折」坂を屈曲した急坂であるが、春の櫻・秋の紅葉の景色は誠によく、その名四方に聞えてゐる。寢殿本坊の傍を過ぎて北に登れば本堂である。これは明治五年の再建で、本尊には國寶の毘沙門天王が安置され、堂前には國寶の珍しい鐵燈籠がある。本堂の西には護摩堂がある。本寺の境内からは昭和六年に百餘點といふ多數の珍品を發掘し、寶物殿に陳列されてある。護摩堂の側から奥の院に向へば、途中不動堂・義經背比石・大杉を経て僧正谷に至りこゝに魔王堂があつて奥の院となつてゐる。

三一、御室妙心寺

北野神社の西南に在る嵐山電車北野起點から電車に乗り、約十分で御室停留場に着き、下車して北行約一五〇米で仁和寺の樓門に達する。本寺は光孝天皇の勅願で今から一千年ばかり前に創立された眞言宗の大寺で、宇多法皇がこゝに入らせられてから御室と呼ばれるに至つた。その後火災にかゝり一時衰へてゐたが、今から三百年程前に朝廷から紫宸殿・清涼殿などの殿舎を賜はつて移築し、將軍徳川家光も厚い庇護を加へたので、完全に再興した。樓門は即ち仁王門で壯麗人の目をひく。中に入れば左側に寺務所があり、その境内に宸殿(大正二年再建)・方丈・唐門・庫裏・林泉など美しく清々しいものがある。仁王門の北方には右に一

株の老松あり、左に櫻樹がある。これは世に聞えた御室の櫻で、厚物（八重櫻のこと）多く、毎年四月二十日頃が満開期である。その東方松林の間には國寶の五重塔が美しく立ち、その附近に霧島つ、じの名所である。更に北に進めば國寶の金堂（紫宸殿を移したもので、彌陀三尊を本尊として安置してある）同じく御景堂（もと清涼殿、今弘法大師の木像を本尊としてまつる）があり、その西南に觀音堂、東に經坊・鐘樓などがある。背後の大内山には約百年前に開かれた御室八十八ヶ所がある。また近年五重塔の南に寶物館を建て、中に國寶の佛像・古器・古文書を始め多くの寶物を陳列し、展覽に便にしてある。

本寺の東南約三〇〇米の地に臨濟禪宗妙心寺派の本山たる妙心寺がある。これは今から六百年程前に花園上皇の御願で創立され、その後應仁の大亂に焼失したが、やがて雪江和尚が中興して再建した。七堂伽藍の完備した禪寺として世に知られ、堂宇は殆んど國寶となつてゐる。山陰線花園驛、または嵐山電車線妙心寺北門停留場に下車するのが便利である。今こゝには南表門から拜觀するものとして説明する。南表門の西方には勅使門、その北方には三門、順次北に佛殿（釋迦如來を本尊とす）法堂・寢殿がある。寢殿の東に大方

丈、更に東に小方丈がある。法堂の西北には鐘樓があり、その鐘は黃鍾調の音を出すと傳へる國寶の古名鐘である。本寺の塔頭も亦よく美觀を保ち、その數も少くない。殊に玉鳳院（花園法皇の御室で、世に花園御殿といふ）微笑庵（開山堂ともいひ、本寺の開山關山無相國師の木像をまつる）東海庵・天授院・靈雲院（世に元信寺といふ。古法眼狩野元信のかいた襖繪が多いからである。）春光院（南燈寺の鐘と傳へる西洋紀元一五七七年の銘の入つたベルを有してゐる）天球院（狩野山樂の襖畫がある）大法院（幕末の志士贈正四位佐久間象山の墓がある。）などは人に知られてゐる。

妙心寺の西南六〇〇米ばかりの所、嵐山電車線太子前停留場の西北に廣隆寺がある。これは今から一千三百年程前に聖德太子の御旨を奉じ、備法興隆のために秦河勝が創建したもので、今は眞言宗の別格本山である。樓門は仁和寺と同じく美しく嚴かな仁王門で、内に入れば左に假金堂がある。本尊は藥師如來の木像で、その北に地藏堂がある。この二堂の前は毎年十月十二日の夜、太秦の牛祭といふ奇體な行事をする所である。その東に國寶の講堂がある。これは今から八百年程前に藤原信賴の再建したもので、世に赤堂と呼ば

れ、内には國寶の阿彌陀如來・千手觀音の木像を安置してある。その北に秦河勝をまつた大秦殿があり、更にその北に太子堂がある。これは正しくは上宮王院といひ、聖德太子御三十三歳の御自作と傳へる木像を安置す。近世に至り歴代天皇の御即位禮に用ひさせられた黄檗染の御袍を賜はり、それをこの像に着せまゐらせる例となつたので、現に昭和三年の大典の節の御袍と同じ御袍が着せられてあるといふ。西に客殿及び庫裏があつてその庭上に太秦形とて珍しがられる石燈籠がある。太子堂の北約五〇米に靈寶殿があつて、國寶の佛像書畫を始め當山の寶物が夥しく陳列されてゐる。庫裏の西方約一〇〇米の所に國寶の桂宮院（鎌倉時代の八角圓堂で、中央に聖德太子御十六歳の時の御自作と傳へる木像を安置す）がある。

十月十二日の牛祭は世に「見るも阿呆、見ぬも阿呆」といふ奇祭で、主役は摩訶羅神で、大牛に跨り青鬼赤鬼の四天王に守られつ、境内假金堂前に來て、意味の判らぬ祭文を讀み上げる。

三二、高

雄

嵐山電車線高雄口停留場から約六軒の所、清瀧川の岸には、紅葉を以て天下に知られた高雄がある。朱塗の橋を渡り屈曲した坂を西に登ると神護寺の境内で、額書石は弘法大師がこの寺にゐて額を書く時に、この石を礎として墨を磨り金剛定寺の四大字を書いて勅命に應へたといふものである。仁王門を入つて一〇〇米程の所に和氣清麻呂の廟があり、その脇にその墓道（墓へは約三〇〇米ある）がある。金堂はその西南にあつて國寶の藥師如來像を本尊とし、講堂はその北に在つて五大堂ともいひ、國寶の五大尊や五大虚空藏像を安置する。本堂の西には國寶の弘法大師像を本尊とする大師堂があり、東北の鐘樓の鐘は世に「三絶の鐘」といふ名鐘で、今から一千年程前に橋廣相の序文・菅原是善の銘文を藤原敏行が書いてそれを刻した鐘である。更に奥に進めば地藏院に達する。その堂前は清瀧川を脚下に見おろす斷崖で、土器投げに興ずるものが多い。本寺は今から一千百年程前に建てられた古寺で、弘法大師・文覺上人を始め名僧が住まつたこともあり、今眞言宗の別格本山となつてゐる。

神護寺からもとの朱塗橋を渡り、清瀧川に沿うて約七〇〇米を上流に行けば眞言宗の西明寺に達する。こ

は横尾といひ紅葉の一名所である。

西明寺から更に川に沿うて約五〇〇米上れば、また紅葉に名を得た眞言宗の栴尾山高山寺に達する。今から七百年程前の大徳明恵上人の興した寺で、國寶の石水院を始め堂坊・茶室に美しい建物がある。此の地は高雄・横尾と合せて世に三尾といひ、眞言宗の古刹と秋の紅葉とにその名をまじりあかしてゐる。

三三三、嵐山 大堰川

嵐山は京都の西部に連なる愛宕山脈中の一山で、春の櫻と秋の紅葉の名勝である。櫻は今から六百五十年程前に吉野から移植したものであるが、楓は既に一千年も前から名所に數へられてゐた。中腹に黄檗禪宗の大悲閣(千光寺)があつて、角倉了以の木像をまつり、その記念碑もある。大堰川は京都府北桑田郡の山谷からその源を發し、船井郡を過ぎ、南桑田郡保津村あたりに來て保津川と呼ばれ、嵐山の下を流れる所では急流となつて奔下し、渡月橋あたりで大堰川といひ、更に下つて桂川となり、遂に淀川に入る。この川は急流

である上に岩石處々に横にり、船筏を通ずべくもなかつたが、今から三百餘年前に嵯峨の人角倉了以が、少からぬ辛勞を費して開通し、今見るやうに船筏をたやすく通じ得ることゝなつた。渡月橋の上三〇〇米ばかりの左岸に千鳥淵といふ深みがあり、今から八百年程前に横笛といふ女官の一人が、北面の武士瀧口入道に心を寄せ、世をはかんで身をこゝに投じたといふ傳へる。この淵の上が亀山公園で、園内に角倉了以の銅像と記功碑がある。渡月橋の上一五〇米ばかりの左岸に小督の局の墓と傳へるものがある。小督局は今から七百五十年程前の高倉天皇の御寵愛の女官であつたが、平清盛がその女徳子を天皇の中宮に納れ奉り、その御寵愛を専らにしやうと企てたため、宮中から逐ひ出されて、嵯峨野の奥のこゝに來、うき年月を送つて後遂にはかなくなつたといふのである。

渡月橋の北方二〇〇米ばかりの西側にある臨濟禪宗天龍寺派の本山の天龍寺は、足利尊氏直義兄弟が、後醍醐天皇の崩後、その御高恩にむくむ奉るために、夢窓國師の勸めを用ひて創建した寺で、京五山の第一に數へられるものである。

大覺寺は古義眞言宗の大本山で、今から一千餘年前に、嵯峨上皇の離宮を寺に改められたものである。歴代天皇の入御遊ばされたこともあり、宮門跡として世に知られ、嵯峨御所ともいはれる。五百四十餘年前に大覺寺統の諸上皇がこゝに入らせられ、殊に後龜山天皇が吉野から御還幸の時には、先づこの寺に入らせられ、後小松天皇に父子の約を以つて皇位を譲らせられたのである。

渡月橋の北東五〇〇米の地には右大臣清原頼業（今から七百五十年程前の人）をまつた車折神社がある。いつの頃にやこの社前を牛車に乗つて通りかゝつたある人の車が折れ、牛は倒れたので、この社名が起つたといふ。今は貸金回収の神として信仰せられる。毎年五月十四日にはこの社から御座船（神霊）詩歌船・舞樂船（龍頭）管絃船（鑼首）と隨侍船を出し、大堰川にそれを浮べて、渡月橋の上流で神事を行ひ、舟からは古風な扇を投げる。これは醍醐天皇の御代に行はれた大堰川行幸の故事を記念するもので、世に舟遊祭と呼んでゐる。

天龍寺門前の嵐山驛から愛宕電鐵の電車に乗れば、十五分ばかりで終點清瀧驛に達し、徒歩清瀧川の橋を

渡れば、二〇〇米ばかりで愛宕ケーブルの起點に着く。こゝからケーブルを利用し七分程にして愛宕山の頂上附近に至る。この山は海拔一〇〇〇米に近く、頂上には伊弉册外五柱をまつた府社愛宕神社があり今は火難除の神として崇信せられる。附近にスキー場もあつて、四時登覧の客が絶えない。

三四、醍醐寺

醍醐寺は京都市伏見區醍醐町にある眞言宗の大本山で、今から一千年ばかり前に聖寶（理源大師）の創建したもので、その後賢俊・滿濟・義演などの名僧もこゝから出た。豊臣秀吉がこゝに盛大な花見の宴を張つたことは世に知れ亘つてゐる。徳川氏も代々よくこの寺を保護したので、室町時代の衰運を挽回し、近年殊に寺運隆昌に赴き、堂宇殿舎の整備世に比類少きものとなつた。本寺を訪ふには今熊野・東海道線山科驛・京阪電車六地藏驛の三ヶ所から何れも乗合自動車が出るから、それを利用するが便である。

寺は今上下の兩寺となつてゐるが、山科街道に沿ふ總門を入り、山門（仁王門）を通過して東に進むと國寶

の金堂(薬師三尊を安置す)があり、その東に理源大師をまつる開山堂、東南に國寶の五重塔(約一千年前の建築)がある。山門の手前の北側の門を入れれば、門跡の住寺であつた三寶院がある。これは豊臣秀吉の保護によつて特に美觀を加へたもので、その大書院は古の寢殿造に倣ひ、西に泉殿、東に釣殿があり、庭は秀吉の意匠に成り、襖繪は狩野山樂・石田幽汀などの名家のものが多し。その他唐門・枕流亭(茶室)・枝垂櫻など觀るべきものである。

下醍醐の金堂から約四軒の坂を登つて深雪山の頂上に行くと、そこに上醍醐寺がある。國寶建造物の清瀧社(龍神をまつる)・薬師堂・五大堂(不動明王を始め五大明王をまつる)・經藏(宋版一切經を納めてある)があり、閑靜幽寂の別天地である。一千年の古寺だけあつて古い文書・寫經・名畫・寶物など數萬點に上り國寶だけでも實に夥しいものである。

三五、宇治平等院

京阪電車線の黄檗驛の東方約一五〇米に黄檗禪宗の本山萬福寺がある。これは今から三百年程前に支那の明から歸化して來た僧隱元の開いたもので、七堂伽藍よく整ひ而も支那風に出來てゐて、皆國寶となつてゐる。總門・三門・天王殿(四天王の木像をまつる)・鐘樓・伽藍堂・禪悅堂(食堂)・齋堂・大雄寶殿(本堂で釋迦如來像を安置す)・法堂・東方丈・西方丈・選佛場(佛殿で觀音像をまつる)・祖師堂(達磨大師をまつる)・鼓樓・開山堂(隱元禪師即ち眞空大師の像をまつる)など前後左右に對立し、さすがは禪の淨境と感ぜしめる。西北方一五〇米ばかりの丘上には有名な鐵眼禪師の作つた一切經七千餘卷の木版を納めた倉が立ち並んでゐる。

山門を出れば日本の茶つみ歌

芭蕉

宇治線の終點驛を下れば前は宇治橋である。宇治川は琵琶湖から流れ出る勢多(瀬田)川の下流で、終には淀川となる。宇治橋は今から一千三百年程も前に始めて架けられ、奈良・伊勢方面から京都に來る要路に當るので、古來時々戰場となり、その名を歴史に残してゐる。西から橋柱の三つ目は三の間といひ、特に掛出

を作り、こゝから茶の湯の水を汲み取るやうにしてある。これは豊臣秀吉から始まつたといふ。橋を渡つて左に折れ東南に二〇〇米程行けば平等院の境内に入る。本寺は今から約九百年前に宇治の關白藤原頼通の建てた天台宗の寺で、今は天台・淨土の二宗を兼ねてゐる。扇の芝は源頼政が平家と戦つて敗れ、こゝに軍扇を敷いてその上で自害したといひ傳へる所、その南の觀音堂はもとの釣殿で、十一面觀音像を安置してある。その南の阿字池に臨んで鳳凰堂がある。これは藤原時代の宮殿建築を佛寺にうつしたもので、中堂には大佛師定朝の傑作の阿彌陀如來の國寶像を安置し、その天蓋・須彌壇と共に精巧を極めてゐる。小壁の長押には五十二體の飛天の雲中供養の相をあらはし、扉には宅間爲成の畫・源俊房の書から成る九品淨土の相をあらはし、當代一流の建築書畫工藝の粹をあつめ、世界に比類なき美術の結晶である。中堂から左右に翼廊・後方に尾廊を出し、建築の全體を以て鳳凰の飛ぶ形となつてゐるが、棟の兩端に一對の銅製鳳凰を置き、風に隨うて舞ふしかけとなつてゐた。池の南にある鐘樓の鐘は前に記した高雄山神護寺及び大津三井寺のそれと合せて日本三名鐘の一に數へられ、特に本寺の鐘は形のよいことで鳴り響いてゐる。堂後には天台宗の最終

院と淨土宗の淨土院があつて本寺を管理してゐる。

今から七百餘年前に源義仲を源義經が攻める時、この宇治川を夾んで合戦し、義經の部下の佐々木四郎高綱と梶原源太景季が、渡河の先陣争をした物語は、世人のよく知ることであるが、その馬を河に入れたといふ橋の小ヶ島崎といふ地點は明かでない。昭和六年にその記念碑を宇治橋の上流の島に建てた。

その島の上流に在る浮島には、今から六百五十年ばかり前に、興正菩薩觀尊といふ大徳が殺生禁斷の趣意を以て造つたといふ十三重の石塔が、近年修理を加へて立派に建てられてある。この塔を建て、宇治の網代木で魚を捕ることを止めさせたのである。

平等院の川向ひの宇治神社には仁徳天皇の御弟の菟道稚郎子がまつられ、本殿は國寶である。

天下の奇祭縣祭で有名な縣神社が平等院の西隣にある。

三六、石清水八幡宮

京阪電車線八幡驛に近い男山の頂には官幣大社石清水八幡宮があつて、應神天皇と神功皇后と比咩大神の三座をまつつてある。今から約一千百年前に僧行教が豊前の宇佐の八幡宮からお迎へしてまつたのが起りで、歴代の天皇は篤くこれを御尊崇され、武家の世になると武勇の守護神即ち軍神としての信仰ができて、源氏ではこれを氏神と敬ふに至り、賀茂の祭に對し、本社のを南の祭といつて盛大を極めたものである。石造の一・二・三の鳥居を過ぎ、男山の峰に登れば（近年男山ケーブルが出来たから本殿への参拜はたやすくなつた）左右に社務所・神厨・書院・神廐・神輿舎などを見て南門に入る。社殿は八幡造とて、拜殿・幣殿・舞殿・本殿が二棟に南北に連なつて建てられ、その兩棟の軒の接する所に、金の繩をかけ渡してある廻廊の東には樟の大木があり、楠木正成の手植といひ傳へる。本社の東門を出て急坂を下ると、攝社石清水社（天御中主神をまつる）の傍に、岩間から湧出する泉がある。これが石清水の名の起つた根元である。

京都關係重要年表

紀元	天皇	重要事項
一五四一年から一五〇〇年まで	桓武	平安京奠都 和氣清麻呂、坂上田村麻呂征夷大將軍となる
	平城	延曆寺・鞍馬寺・東寺・清水寺・檀林寺・誓願寺・西明寺を建つ
	嵯峨	最澄は天台宗、空海は眞言宗を傳ふ
	淳和	小野篁・橘逸勢・百濟河成（畫家） 勸學院・學館院など興る
	仁明	智證大師・慈覺大師
一一五一年	文德	藤原氏攝政・關白となる

年〇〇八一	でま年〇五七一	でま年〇〇七一
鳥堀 羽河	白後後後 河三冷朱 條泉雀	後三一 一條條條
尊勝寺・最勝寺・圓勝寺・得長壽院 融通念佛宗起る	鳳凰堂(平等院)・法勝寺を建つ 源頼義・源義家 延暦寺の僧三井寺を焼く 白河法皇熊野高野山に参詣	藤原道長・上東門院・紫式部・藤原佐理(書家)・藤原行成(書家)・藤原頼通・ 定朝(佛師)・恵心僧都(僧・畫家) 法成寺・草堂を建つ 源頼光・源頼信・藤原保昌

でま年〇五六一	でま年〇〇六一	でま年〇
花圓冷村 山融泉上	朱醍宇 雀翻多	光陽清 孝成和
六波羅蜜寺を建つ 空也・源満仲・元三大師 北野神社を創立	菅原道眞・紀貫之・三善清行・源經基・小野道風 勸修寺建つ 古今和歌集成る 平將門亂をなす	平野神社 石清水八幡宮・吉田神社・八坂神社・仁和寺・神護寺・醍醐寺創立 都良香・菅原是善・在原業平・僧正遍昭・源融 巨勢金岡(畫家)

〇〇〇二	でま年〇五九一	でま年	〇〇九一	でま年〇五八一	でま
後二條 後伏見	伏見 後宇多 龜山 後深草 後嵯峨	仲恭 後堀河 四條	順德 土御門 後鳥羽	安徳 高倉 六條 二條 後白河 近衛	崇徳
天龍寺・大徳寺・妙心寺創立 寧一山・師鍊 <small>しれん</small>	日蓮宗・時宗起る。東福寺・本願寺・南禪寺を建つ 藤原信實(畫家) 土佐吉光(同) 文永の役 弘安の役 興正菩薩・藤原道家	承久の亂 六波羅府起る	臨濟宗・曹洞宗傳はる。眞宗起る 建仁寺・佛光寺・東福寺・榊尾高山寺創立 榮西・道元・法然・親鸞・文覺・明惠・藤原定家(歌人)・運慶・湛慶(佛師) 藤原隆信・住吉慶恩	保元の亂・平治の亂・鹿ヶ谷事件・宇治川の戦 平清盛・平重盛・平宗盛・源義朝・源頼平・源頼朝・源頼政・源義仲・藤原俊成(歌人) 土佐光長(畫家) 淨土宗起る。三十三間堂創立 福原に遷都。三條大橋を起す 妙法院・黒谷光明寺・知恩院を建つ	平正盛・源爲義・大江匡房・平忠盛・鳥羽僧正・西行

〇三二	でま年〇五二二	でま年〇〇二二	でま年〇
後陽成	後正親町 後陽成	後奈良 後柏原	後土御門
豊臣秀次・徳川家康・前田利家・豊臣秀頼・角倉了以・細川幽齋・狩野探幽・徳川家光・澤庵・崇傳・小堀遠州・本阿彌光悦・岩佐又兵衛 東本願寺・二條城・東山大佛殿再建 高臺寺起る	足利義輝・同義隆・同義昭・織田信長・豊臣秀吉・三好長慶・松永久秀・明智光秀・千利休・狩野永徳・同山樂・長谷川等伯・海北友松・方甚五郎(彫刻家) 西陣織始まる 天主教傳來・織田信長上京・二條新御所成る。叡山焼討・足利氏亡ぶ。大阪石山合戦・本能寺の變・山崎合戦・叡山再興・聚樂第成る。東山大佛殿建立・北野大茶湯・南禪寺をたつ	足利義隆・同義澄・同義晴・細川政元・同高國 蓮如(僧) 土佐光信・狩野元信(畫家)・武野紹鷗(茶人) 信樂燒・樂燒など始まる	應仁の大亂・銀閣寺成る 赤松滿祐の叛・四條大橋起る・京都に七關を設く

五一二	でま年〇〇一二	でま年〇五〇二	でま年
後花園	後稱光 後花園	後小松 長慶 後村上 後龜山	後醍醐 花園
(以上畫家) 足利義勝・同義政・同義尚・細川勝元・山名宗全・一休(僧)・雪舟・小栗宗丹・蛇足	京都朝廷に復す。北山殿行幸・金閣成る 足利義滿・同義持・同義量・同義教・明兆(畫家) 明德の役・應永の亂	懷良親王・北畠親房・楠木正行・足利尊氏・同義詮・赤松則村・高師直 吉野朝廷時代・五山十刹定まる・室町花の御所成る 夢窓國師・妙葩	護良親王・日野資朝・日野俊基・新田義貞・楠木正成・名和長年 正中の變・元弘の亂

でま年〇五五二	でま年〇〇五二	でま年〇
明 孝 治 明	仁 光 孝 格	光 後 格 桃 園
<p>梅田雲濱・頼鴨涯・吉田松陰・橋本景岳・梁川星巖・村岡局・僧月照・佐久間象山 平野國巨・木戸孝允・西郷隆盛・徳川家茂・同慶喜・松平容保・岩倉具視・三條實 美・大久保利通・春日潜庵(儒者)</p> <p>學習院創立・皇居炎上・安政の皇居成る。安政の大獄・通商條約の勅許始めて慶 應元年に至つて行はる。和宮降嫁・寺田屋事件・京都守護職を置く。八月十八 日の政變・七卿落・池田屋騒動・長州征伐・大政奉還・王政維新・鳥羽伏見の戦。 車駕東幸・藩籍奉還・明治五年京阪間電信開通・明治九年京阪間鐵道開通・二條 離宮設定・京都市制施行</p>	<p>冷泉爲恭・酒井抱一・吳春・松村景文・田能村竹田・岸駒(以上畫家)高山彦九郎・ 頼山陽・香川景樹(歌人)</p> <p>尊號事件起る。東山大佛雷火を受く</p>	<p>竹内式部捕へらる。京都大火皇居炎上。寛政の皇居成る</p> <p>清水焼始まる</p>

五四二	でま年〇〇四二	でま年〇五三二	でま年〇
後 桃 櫻 園 町	櫻 中 東 町 御 山	靈 後 後 元 西 明	明 後 正 水 尾
<p>與謝蕪村(俳人・畫家)池野大雅・圓山應舉・長澤蘆雪・伊藤若沖(以上畫家) 荷田在滿・僧伯隱・手島堵庵(心學者)</p> <p>乾山焼起る</p>	<p>閑院宮家始まる</p> <p>土佐光起・尾形光琳・俵屋宗達(以上畫家)・松尾芭蕉・大石良雄・貝原益軒・細井 廣澤・荷田春滿・伊藤東涯・石田梅巖</p>	<p>萬福寺・法然院をたつ</p> <p>黄檗宗傳はる。京都大火・友禪業起る。茶道裏千家起る。漢學者輩出</p> <p>松永貞徳(歌人)・僧隱元・千宗旦(茶人)・石川丈山(詩人)・狩野尙信(畫家)・山 崎闇齋・僧木庵・北村季吟</p>	<p>伏見城を築く。檢地終る。大地震大佛殿潰ゆ。豊國廟・關原の戦・京都所司代・ 大阪陣・二條城行幸・京焼始まる</p> <p>東大谷・西大谷を分つ</p>

昭和十一年五月二十日印刷
昭和十一年五月卅一日發行

編輯者

京都市産業部觀光課

右代表者

西田利八

京都市上京區寺町通今出川上ル

印刷者

水上徳太郎

京都市上京區寺町通今出川上ル

印刷所

榮文堂印刷合名會社

終

京都市觀光課

